命の大切さを学ぶ教室
全国作文コンクール
第7回【優秀作品集】

警察庁 犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）が受ける被害は、犯罪行為そのものによって生じる心身の被害のみでなく、周囲の人々による心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難、社会からの孤立感など、その影響は広範囲かつ長期間にわたります。

犯罪被害者等が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等を直接対象とした支援のみならず、地域社会や学校・職場、さらには将来の社会を支える子どもたちに、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深めていただき、社会全体に犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から全国警察では、これからの社会を担う中学生・高校生を対象に、犯罪被害者等による講演や犯罪被害者等の手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた様々な痛み、子どもを亡くした親の思い、命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を望む犯罪被害者等の思いを伝える「命の大切さを学ぶ教室」の開催や、大学生を対象とした被害者支援に関する社会活動への参加の促進など、「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」に向けた取組を、犯罪被害者等の御協力を得ながら、教育委員会、民間被害者支援団体等と連携して積極的に進めています。

中でも、「命の大切さを学ぶ教室」は、犯罪被害者等への理解・共感を生むとともに、規範意識の醸成にもつながっています。

「命の大切さを学ぶ教室全国作文コンクール」は、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させる取組として、警察庁が平成二十三年度から開催しているものであり、一昨年度からは新たに文部科学大臣賞が設けられ、「命の大切さを学ぶ教室」に参加する中学校・高校も増え、この取組の更なる広がりが期待されるところです。

本冊子は、平成二十九年度の第七回全国作文コンクールにおいて、全国から応募された作品の中から選考した

国務大臣・国家公安委員会委員長賞・・・二点
文部科学大臣賞・・・・・・・・・・・・・・二点
警察庁長官賞・・・・・・・・・・・・・・・六点

の優秀作品をとりまとめたものです。

警察としては、被害者支援に携わる方々との緊密な連携の下、今後も「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」の実現に向けて、「命の大切さを学ぶ教室」を始めとする諸施策に取り組んでまいりますが、本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等はもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

平成三十年二月十日

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当）小島　隆雄

目　次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・たった一つの命　小坂町立小坂中学校　二年　照井　和花　……1

【文部科学大臣賞】

・「尊きいのち」みつめて　私立滝中学校　三年　平賀　美咲　……2

【警察庁長官賞】

・世界で一番大切なもの　岐阜市立岐阜西中学校　三年　日石　遥香　……3
・「かけがえのない命を守るために」　浅口市立金光中学校　三年　髙渕　莉緒　……4
・命の大切さ　高知市立西部中学校　三年　大平　龍之介　……5

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・亡き祖父との約束　愛媛県立今治東中等教育学校　四年　井手　結茄……7

【文部科学大臣賞】

・「今を生きる」　山梨県立都留高等学校　三年　山本　悠希……9

【警察庁長官賞】

・悲しみから芽生えた私の思い　北海道伊達高等学校　二年　東倉　志穂……11
・幸せな社会を目指して　東京都立墨田川高等学校　一年　鈴木　智葉……13
・自分の命　石川県立金沢北陵高等学校　三年　杉山　明璃……15

【中学生の部】

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

たった一つの命

（秋田県）
小坂町立小坂中学校　二年　照井（てるい）　和花（わこ）

私の命は一つしかありません。それは、世界中の人々も同じです。このあたり前の事実が「命の大切さ教室」に参加し、あたり前ではないと気付かされました。そして、一人一人がもっと真剣に向き合って、一日一日を大切にしなければならないと強く思いました。

「命の大切さ学習教室」で、涼香ちゃんのお母さんが、涼香ちゃんが事故で亡くなってしまうまでの事を丁寧に教えてくれました。

涼香ちゃんが、小学校で作ったカレンダーには、「冬は楽しみがたくさんあります。また来年も楽しみが来るといいな。」と、一年生らしい言葉が書かれてありました。

そんな涼香ちゃんの楽しみが消えてしまった二〇〇〇年十一月二十八日。集団登校の列に飲酒運転の軽トラックが突っ込み、二人が死亡し、六人が怪我をする事故が起きました。涼香ちゃんは、一緒に通学していた六年生と四年生の二人の兄の目の前で、一人、天国へと旅立ってしまいました。私も小学生の頃、団体登校をしていました。その時に事故が起きていたらと考えると、とても身近に思えて怖くなります。いつもと変わらない朝を過ごし、いつものように登校する途中で、非常識な飲酒運転という行為で、命を落としてしまう。これからの未来に夢や希望あふれる何の罪もない女の子が命を奪われてしまうことがあって良いのでしょうか。本当に悲しく、胸がしめ付けられる思いです。

涼風のように心地よく、たくさんの人を幸せで包んで欲しいと名付けられた涼香ちゃん。その名の通り、優しい心を持った笑顔の似合う女の子でした。そのあふれる笑顔も一瞬で全て消えてしまう。それが事故の現実です。

「命」は、誰しも平等にたった一つ。ゲームのようにリセットは出来ません。「飲酒運転」は絶対に許されることではないのです。また同時に、生きたいと願いながら亡くなってしまった方々を思う時、自ら命を絶つことも決してあってはならないことだと強く思うのです。悲しいことに、毎日のように「いじめ」のニュースがテレビから流れ、消えることはありません。それが原因の自殺も数多く聞かれます。命を絶つ前に何か出来ることはないのでしょうか。一人一人が思いやりの心を持ち、ほんの少しの勇気で相手を考えてあげられることが出来たら…何か変わってくるかもしれません。涼香ちゃんのように命を落としてしまった人、震災で亡くなってしまった人々。どうすることも出来ない、やりきれない気持ちでいっぱいですが、そんな時、改めて私は自分の命を大切にしていきたいと思うのです。また、自分の命と同じように、相手の命も大切にしていきたいです。

私は、「命」について様々な事を感じ、そして考えました。世界の全ての人が、命の重みを分かち合っていけるようにと願いながら。

【文部科学大臣賞】

「尊きいのち」みつめて

（愛知県）
私立滝中学校　三年　平賀（ひらが）　美咲（みさき）

「人の命は地球より重い。」これは四十年前に起こったハイジャック事件の際、当時の首相が発表した声明を元にした言葉だそうです。私は今まで道徳の授業などでこの言葉を何度も耳にしてきましたが、抽象的で哲学的な響きを持つこの言葉を、押しつけがましく感じ、少しうんざりしていました。もちろん、命がなくなることへの不安や恐怖はありましたが、それを身近に感じることはありませんでした。しかし、そんな私の認識を大きく変えてくれたのが、佐藤逸代さんの「命の大切さを学ぶ教室」でした。

私は、困った時や、苦しい時に「死ぬ」という言葉を軽い気持ちで使っていました。テストの結果が悪いと「数学死んだ。」宿題が多くて「もう死にたい」夏になれば「暑くて死にそう。」心のどこかで、「死ぬ」と言えば、弱い自分でも困難を吹き飛ばして、気持ちを楽にできると思っていました。しかし佐藤さんの講演を聴いて、私の甘さを痛感し、今までの「軽さ」が恥ずかしくなりました。さらに最愛の娘を亡くすという想像のできない体験を、涙ながらに語って下さる佐藤さんの姿がいつの間にか私の母と重なり、胸が締め付けられました。

その日、急に母が恋しくなった私は、家に帰るとすぐ、台所の母に「もし私が死んだらどうする？」と聞いてみました。いつも能天気にふるまう母のことだから、きっと「なに言っとんの～」と笑って答えるだろうと思っていました。ところが、母は濡れた手を拭こうともせず、ぎゅっと私を抱きしめ「何があったの？」と真剣な眼差しで聞いてきました。学校で講演があったことを話すと、母は安堵の表情を浮かべ、台所へ戻っていきました。この時、優しくて温かいものが私の体に流れ込んできました。母の愛は、弱い自分を何にも縛られることなく、丸ごと包んでくれる愛でした。だから私は、母の愛を全身で受け止めることができたのです。私は、自分の存在そのものを大切にされていると感じて、幸せで胸がいっぱいになりました。しかし同時に、自分の存在を軽んじて、弱い自分と向き合っていなかった自分に気付かされました。

佐藤さんは事故後、多くの人に支えられて「自分を愛することで人を愛せる」ことがわかったとおっしゃっていました。私はこの言葉に深い意味を感じ、心が震えました。私は今まで自分の弱さを「軽さ」にすりかえてごまかしてきました。しかし、これからは自分の弱さを自分で認め、まわりの人の弱さも認められる人になります。そうしてお互いに弱い姿も受け入れ合うことが理想です。

それが命を大切にするということの始まりなのではないでしょうか。だから私は、命を軽視しないために、弱い自分でも愛することから始めたいと思います。

【警察庁長官賞】

世界で一番大切なもの

（岐阜県）
岐阜市立岐阜西中学校　三年　日石（ひのいし）　遥香（はるか）

私は自分の息子が未成年の少年達によって殺害された方の体験談を聞きました。話を聞いてまず思ったことは『ひとって恐ろしいな』ということです。まだ未成年の少年達で大人よりも考え方が幼く、本気で殺してやろうとは考えていなかったと思います。その気がなくても、大切な命を奪ってしまう『ひと』がこわいです。もしかしたら、明日私自身が被害者となるかもしれません。もしかしたら、今日私の周りの人が加害者になっているかもしれません。そんな『今の世の中』もこわいです。加害者や被害者にならないためにも、もう一度周りの人との関わり方を考えていきたいと思いました。

体験談を聞いた日の夜、話の内容を思い出していると、私の母と同じ言葉を言っているのを思い出しました。それは「世界で一番大切なものは子どもの命」という言葉です。私は今年の春休みに、母からこの言葉を言われました。

私は部活動で仲間との関わり方が分からず悩んでいることが多くありました。悩むたびにストレスとなっていました。今まではストレスがたまると当たり前のように母に相談していました。しかし最近は、悩んでいることを相談するのが恥ずかしいことだと思うようになっていました。なのに、誰にも相談できない自分にものすごくイライラして、さらにストレスがたまっていました。今年の春休み、そのストレスが爆発してしまい、全く関係のない母にあたってしまいました。思ってもいないことや母が傷つくだろうと思うこともたくさん、たくさん言いました。怒られて当然の私に母は、

「ごめんね。」

と言いながら、私を抱きしめてくれました。そして、

「気付いてあげられなくて、ごめんね。だけど今度からはちゃんと言ってね。言わないと伝わらないよ。私にとって子どもは世界で一番大切なものだよ。私の命よりも大切なものなの。」

と言って、泣いてくれました。

その母の姿と話してくださった方がすごく重なって見えました。親の偉大さを感じることができました。

改めて、人との関わり方を考えるきっかけになったので良かったです。仲間、先生、家族や親せき、そして自分自身も大切にしていきます。

もし、自分が親の立場となった時に、世界で一番大切なものを守られるようになりたいです。

【警察庁長官賞】

「かけがえのない命を守るために」

（岡山県）
浅口市立金光中学校　三年　髙渕（たかぶち）　莉緒（りお）

私は市原さんのお話を聞いて、今でも印象に残っている言葉があります。「自分の片手を出して、もう一つの手で握って下さい。ぬくもりがありますよね。圭司が生きていた時は、みんなと一緒でした。でも、亡くなった時、そのぬくもりは消えていました。」

この言葉を聞いた時、私はとても胸が締め付けられました。それと同時に、なぜそんなにひどい事が出来るのだろうという加害者への怒りが沸きました。絶対にしてはいけないと分かっているはずなのに…。なぜ…。

テレビ等で残酷な殺人事件を、毎日のように耳にします。どうやら、「人が人を殺す」ことは、そう珍しい事ではなくなってしまっているようです。不思議に思いませんか。人の命は奪ってはいけないと誰もが知っているのに、殺人は連日、どこかで起きていることを。

そこで、私なりに考えた結果、やはり一番の原因は、命の重さや尊さを軽視していることだと思います。しかも、その誤った考えは子供だけでなく、大人達までも浸透しています。

「いじめ」、「DV」、最悪の場合は、親が我が子を殺してしまう事すらあります。この程度殴っても死にはしないだろうという根拠のない愚かな思考が間違った行動につながるのだと思います。そもそも、殺さなければ良いという事ではありません。

そしてもう一つは、世の中の希薄な人間関係も大きく影響していると思われます。

よく、「いじめ」の報道が流れる時、同級生や被害者の友人は、「気がつかなかった。」、「知らなかった。」と口をそろえて話しますが、本当に全員が知らなかったのでしょうか。仮に知らなかったとしても、「仕方がない」で片付けられる問題ではないはずです。

私は、「自分以外はどうでもいい」という無関心な精神を恐ろしく感じます。なぜなら、助けを求めてもきっと、気づかないフリをして救ってはくれないからです。もし、自分がどんなに小さな事でも勇気を出して行動したら、人の命が助けられるかもしれないと考えることが、最初から薄れているからです。ひとりひとりが他人を思いやれる気持ちを大切にできれば、暴力やいじめも減るのではないでしょうか。

いつどこで、事件や事故に巻き込まれ、被害者になるかは、誰にも分かりません。しかし、加害者になることは未然に防げます。そのためには、命は唯一無二であるという当然の事をまず意識することです。生命を軽んじる犯罪を決して見過ごしてはいけません。

「犯罪は許さない」という思いが強ければ、大きな力になります。そうすれば、みんなが望む犯罪のない平和な世の中に向かえることでしょう。

【警察庁長官賞】

命の大切さ

（高知県）
高知市立西部中学校　三年　大平（おおひら）　龍之介（りゅうのすけ）

「命の大切さってどのくらいですか。」

僕は、この質問に答えることができませんでした。命の大切さがあまりにも大きく、どのように表したらいいのか分からないという訳ではなく、今までの人生で本当の意味での命の大切さを感じたり考えたりしたことがなかったからです。

そんな僕に命の大切さを考えさせてくれるきっかけがありました。それは、市原千代子さんのお話をきいたことです。市原さんは、次男・圭司さんの命を、少年らの暴行により奪われました。市原さんの言葉に、心に残っているものがあります。それは、「手を合わせてみて。温かいでしょう。その手はいつか好きな人の手とつながり、新しい命につながっていく手です。でも、その手は息子の命を奪うような暴力を振るうこともできる」という言葉です。人の命はいつか終わります。その終わり方は人それぞれです。しかし、いじめや暴力により終わるのは、あってはならないことです。人は新しい命を誕生させることができます。しかし、人の命を終わらすこともできます。人に人の命を終わらす権利はありません。命は、その人だけのものではないのです。なぜなら、誰かが死ねばその人の家族や友達などたくさんの人が悲しみます。また、自分ひとりだけの力で命が続いていくわけではありません。家族や友達など周りの人たちの力がなければ命は途絶えてしまうでしょう。そして、人の命は一人では次へとつないでいくことができません。お母さんとお父さんがいて、そのお母さんとお父さんがいて、またそのお母さんとお父さんがいて…と果てしないくらいたくさんの人の命のバトンがつながって一人の命へとなっていくのです。

バトンがつながってきた一人も、「つないでもらう側」から「つなぐ側」へとなっていくのです。命は美しいという言葉をきいたことがありますが、それは間違っていないと思います。

では、命の大切さとはどのくらいなのでしょうか。僕の思う答えは、〝命の大切さは、人によって感じ方、考え方が違うものである〟です。また、その人の命の価値観は他の人が否定できるものではないと思います。しかし、明らかに間違っている命の価値観もあります。そのような価値観を正すのは、人です。ただし、僕の思う命の大切さが正しいかどうかは分かりません。ただ、命は一つしかないということははっきりしています。その命をどう使うかは人それぞれです。しかし、一つしかない命のなかで他の人の命を奪ったり、命を大切にしたりしないのは間違っていると思います。

僕はまだ本当の命の大切さを理解できていないと思います。生きていくなかで少しずつ理解していくと思います。だからこそ、命を大切にして生きていきたいと思います。

【高校生の部】

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

亡き祖父との約束

（愛媛県）
愛媛県立今治東中等教育学校　四年　井手（いで）　結茄（ゆうな）

私も講師の先生のように、被害者遺族の一人です。私の祖父は五年前に交通事故に遭い、命を落としました。祖母の誕生日に家族そろってお祝いをした帰り、祖父は車にはねられてしまいました。その日は大雪でした。視界が悪く、祖父が青信号で横断歩道を渡っている際、右折してきた車にはねられてしまいました。そのときは右足骨折と脳内出血のための入院ということでしたが、会話もできていた祖父の容体は徐々に悪化し、三週間後には、話すことも笑うことも泣くこともできない植物状態になってしまいました。祖父が亡くなったのは、それから二年後です。桜の花が満開に咲き誇る天気の良い穏やかな一日でした。

私は今でも、雪が降ったり桜の花が舞ったりするのを見るたびに、祖父の笑顔を思い出します。入院中話すことができなくなっても、私と弟に向かって嬉しそうに微笑んでくれたことを忘れることができません。一番辛く苦しかったのは祖父自身なのに、私たちに気を遣ってくれた優しい祖父。あの時、ご飯を食べに行かなければ。あの時、祖父を一人で帰さなければ。そんな家族の後悔と加害者への怒りは、時が経ってもなお残ったままでした。

そんな中聞いた「命の授業」。こんなにも心に突き刺さった講演はありませんでした。講師の先生の旦那さんは、祖父と同じように交通事故で命を落とされたそうです。そして旦那さんだけでなく、息子さんまで。息子さんは暴力団によって殺害されるという残酷な犯罪の被害者となってしまったそうです。今もまだ心の傷は癒えていないはずなのに、私たちが被害者にも加害者にもならないようにと、涙を流しながら語ってくれた先生。「許す」という尊い行為。許したいから謝罪が欲しいとの切実な思い。祖父のことを思い出して辛くなりましたが、「一人じゃないんだよ」と言ってもらっているようで、私の心もすっと晴れていくような気持ちになりました。どんなに辛く苦しい出来事があっても、人は前を向いていいのですね。私も一歩踏み出す勇気をもらいました。

私は、幼稚園の頃から警察官になるのが夢でした。それは私にとって、亡き祖父との約束でもあります。祖父は、私が警察官になるのを一番楽しみにしてくれていました。小さいころからおてんばだった私をいつも叱ってくれていたのは祖父です。ある時いたずらが過ぎ、隣の家のペットにいたずらをしようとしてしまいました。「他人には迷惑をかけるな。」といつも以上に叱られたことを覚えています。

私はその頃から、悪を許さない正義を持ち、町を守ることのできる、まるで祖父のような、そんな強い警察官になりたいと考えていました。しかし、今回の「命の授業」を聞いて、警察官という職業に大切なのは、それ

だけではないと気付きました。犯罪を許さない心と熱意はもちろん必要ですが、人の心の痛みを理解し、寄り添ってあげられる姿勢も持ち合わせることが大切なのではないかと考えるようになりました。

誰にでも、辛くて苦しくて何もかも嫌になるような経験はあるでしょう。大切なのは、その痛みを受け止め、次の、前へ向かう力に変えることだと思います。もちろん時間は掛かりますし、一人では難しいことです。私の場合は、家族や友達が私の支えになってくれました。私は、そんな他者の痛みを理解できる人になりたいと考えています。これからも周囲の人を大切にし、亡き祖父との夢を叶えるために努力し続けたいと思います。

【文部科学大臣賞】

「今を生きる」

（山梨県）
山梨県立都留高等学校　三年　山本（やまもと）　悠希（ゆうき）

先日、十六年前に起きた池田小事件で娘さんを亡くされた本郷由美子さんの講演を聞いた。本郷さんは、我が子を亡くすという私たちにとって想像をはるかに超えるだろう辛い思いをしながらも、その思いとともに精一杯生きていた。この講演会を通して、私の学校の生徒一人一人が「命の大切さ」について改めて考え直すきっかけとなった気がする。

私も数年前に、大切な人の命を失った。それはあまりにも突然で、私にとってとても衝撃的なことだった。都留市出身である私の伯母（山本美香）は戦場ジャーナリストとして、世界各国の内戦が起こる現場に出向き、女性や子どもなどの弱い立場に置かれている人を中心に取材し、戦下で暮らさなければならない人の声を代弁していた。しかし、中東シリアでの取材中、戦闘に巻き込まれ、命を失うという結果になってしまったのだった。私自身も、私の家族も誰もが皆、伯母が危険と隣り合わせで仕事をしていることは、充分承知しているはずだった。一方で、私の伯母だけは大丈夫だと、帰ってくるものだと、どこか安心していた。しかし、実際にこの受け入れ難い悲しい現実を目の当たりにしたとき、現実を受け止めるのに、相当な時間を要したのだった。

伯母の死を受けて、メディアは伯母が伝えたかったことについて連日大きく取り上げていた。私はそれを見る度、今まで知らなかった伯母の活動を知ることができ、その偉大さを更に感じることになった。その思いが大きくなるにつれ、伯母が見てきたもの、経験してきたことをもっと知りたい、もう一度話をしたいという思いも強くなっていった。だが、いくらその思いが強くなっても、一度失った命はもう二度と戻ってくることはないのだ。この出来事は私に、一つの生命は強く輝きを放ちながらも、一方ではもろくてはかないものであるという感慨を抱かせた。

本郷さんは、講演会の中で私たちに、「今、皆がここにいることが嬉しい。ありがたいことだ。」とおっしゃっていた。一つの命は、いくつもの数えきれないほどの命につながっている。当たり前のことだが、壮大で奇跡的なことなのだと思う。私が今、こうしてこの場にいて生きているということは、亡くなってしまった大好きな伯母を含む、たくさんの命が関わっているのだということを考えると、自然と「命を大切にしなければ」という気持ちが強くなってくる。

現在の日本では、いじめなどが原因で自殺に追いやられてしまう子どもや、殺人事件・交通事故などで失われてしまう命も少なくない。また、世界に目を向けて見ると、テロや内戦、その影響による飢餓状態が永らく続いている地域もある。罪のない人の命が奪われてしまうこの世の中を、少しずつ変えていかなければならない。私の生は、また別の一つの生につな

がっていく。本郷さんの講演をきっかけに、私自身も周りの人を大切にしながら、今をしっかり生きようと改めて心に誓った。

【警察庁長官賞】

悲しみから芽生えた私の思い

（北海道）
北海道伊達高等学校　二年　東倉（とうくら）　志穂（しほ）

今回の講話を聞いて今まで以上に考えさせられるものがあったなと思う。自分が信号を守っていたのにも関わらず、信号無視の車に命を奪われてしまった。このように自分が悪くなくとも事故にあってしまうことがある。私も同じ経験をしたので、このような事故を本当に許せない。一日も早くこのような事故が無くなって欲しいと願っている。

私が小学五年生の時、朝、テレビを見るとあるニュースが流れた。洞爺湖町のある交差点で小学五年生の少女が車にはねられて死亡というニュースだった。私は凍りついた。ニュースに流れた小学五年生の少女が私が保育園から小学三年生までの五年間、一緒に過ごしてきた同級生だった。ほぼ放心状態で学校に行き、教室に入るとクラスメイトの泣いている声が溢れていた。あの光景は今でもはっきり覚えているし、忘れる事はないと思う。この女の子は、友達と横断歩道を歩いていてタオルを落としてしまい、拾おうとしてしゃがみ込んだところに車が突っ込んできた。事故を起こした女性は、「眠くてボーッとしていて信号を見ていなかった。」と話した。本当に信じられなかった。自分が眠くてボーッとしていたからといって、なぜ何も悪くない小学五年生の少女が命を奪われてしまわなければならないのか、私には理解できなかった。

私は友達とクラスを代表して彼女の葬儀に行った。入ってすぐに目に入るのは今までに見たことのない小さな棺。彼女の両親の泣いている顔。見ていることが出来なかった。真ん中にあるのは、いつもの無邪気で可愛い笑顔を浮かべた彼女の遺影だった。花を手向けに前に行くと、彼女の両親が「遠いところわざわざありがとう。なんでうちの子が…。」と言った。何も言ってあげられなかった。そして、涙が溢れてきた。そして、激しい怒りを覚えた。この事故以来、私にはある目標が出来た。

私は今、警察官を目指している。なぜなら、私が体験したような気持ちを他の人には体験して欲しくないからだ。このような事故が一日も早く無くなって欲しいと、強く思うからだ。

このような経験をしたら、人は何を考え、何をするのだろうか。今回講話をしてくださった方は、息子の代わりに自分が息子が目指した夢に向かっての勉強をした。他にも子供に代わって大学に入る人、その仕事に就く人など方法はさまざまだがみんな何らかの行動を起こしている。私は警察官になってこのような事故を無くしたいと今、行動している最中だ。

「事故」は、どうして起こるのだろう。原因には、居眠り・前方不注意・急いでいたからという信号無視などだ。実際、私も夜の部活動帰り友達と青信号を渡っていたところ猛スピードで車が突っ込んできた。その時は、友達が助けてくれ、事故にはならずにすんだ。でもその車は猛スピードの

まま走り去って行った。車に乗っていた人は急いでいたのかもしれないが、もしその時、事故が起きていたらどうしたんだろう。そのまま走り去るのかな…今でも考えることがある。

毎回、長期休業前に命の講話があるが、もしかすると「めんどくさいな。」とか「自分は大丈夫だから、聞く必要ない。」などと思っている人がいるかもしれない。でも、私は辛い経験をした人たちが涙をこらえながら皆に必死に事故の恐ろしさを知ってもらおうと行動に移している、この気持ちをわかって欲しいと思う。講話から何を感じたか。私達は、被害者にも加害者にも成り得るということ。交通事故で悲しむ人が一人でも減る様にと願い、難しいかも知れないが警察官への道を目指して一歩ずつ頑張ろうと思う。

【警察庁長官賞】

幸せな社会を目指して

（東京都）
東京都立墨田川高等学校　一年　鈴木（すずき）　智葉（ともは）

私は今回この教室に参加して、普段の学校生活では学ぶことのできない、生きるうえで大切なことをいくつも学びました。それと同時に、自分の中で常識、当たり前であったことが全て崩された気がしました。佐藤さんのお話は、被害に遭ったことのない私の本当の心の中を見透かしているようで、私は何度も罪悪感に似た複雑な思いを抱きました。

そんな思いになったのは、佐藤さんの「交通事故をただの一つのニュースとして見ていませんか。」という問いかけを受けたときでした。自分ではあまり意識したことはなかったのですが、いざ聞かれてしまうと違うと自信を持って言えないです。普段そういったニュースを目にしたとき、かわいそうだ、大変そうだ、自分も気をつけなければ、と思うだけで、聞き流してしまっていました。

だから、被害者遺族は自分と重ねてしまうということを知ったとき、胸が苦しくなりました。私には被害者遺族の悲しみや憎しみがどれほどのものか分からないからといって開き直り他人事にするような人ではなく、分からないなりに寄り添ってあげようという優しさを持った人になりたいとそのとき私は初めて思いました。

さらに、それと同じような気持ちになったのは、佐藤さんが「殺人よりも事故の方が軽い罪であるとみなさんは思っているでしょう。」とおっしゃっていたときでした。私はその瞬間、衝撃を受けました。まさにその通りだったからです。その考え方はどうして違うのか分からなかったので話を聞き続けていると、「被害者遺族にとって大切な人が亡くなったことにかわりはない。」「故意犯罪は事故としてではなく事件として扱われるべきだ。」と主張する佐藤さんの姿がありました。その姿を見て、やはり私は分かっていないんだということを思い知らされました。ただ、被害者に寄り添えていないのは現代の日本社会も同じだと思うのです。社会全体の考え方として、事故はしかたないことと定着してしまっているのが悲しいところです。さらにその考え方によって判決が左右されて被害者側の望む結果が得られないというのがもっと悲しいところです。大げさに言えば、故意でなければどんなことをしても許されるのか、という話です。私は、もし自分が被害者遺族だったらと考えると、そんな社会は絶対に嫌です。だから、将来の日本社会を守るためにも、私自身が社会的弱者が暮らしやすい社会を作るための手助けが出来る、もしくは佐藤さんのように社会に直接訴えかけられるような人になりたいです。

そして、佐藤さんの発言に共感したこともありました。「言葉は便利だが凶器にもなりうる。」という発言です。佐藤さんの実体験を聞いて、どんなにきれいな言葉を使っても、言い方が良くとも、言っている側に全く

悪気がなかろうとも、場合によっては相手をさらに苦しめることもある、ということを学びました。これを学んでから私は常に誰に対しても言葉の選び方に気をつけていこうと決めました。

そして最後に私がいちばん心に残っていることについて述べたいと思います。それは、佐藤さんが繰り返しおっしゃっていた「誰も明日は保証されていない。」という言葉と、「人、場所、時間、関係なく死はやってくるからこそ、自分の命も人の命も大切にしてほしい。逆に大切にされている、という自覚も持ってほしい。」という言葉です。自分のためにも周りの人のためにも、今を生きていることへの感謝を忘れずにこれからを生きていきたいと思いました。

このように、私はこの教室で新たなことを学ぶとともに今まで知らなかった自分を知ることができました。この経験をもとに自分の内面を磨き、他の人へ伝えていきます。

【警察庁長官賞】

自分の命

（石川県）
石川県立金沢北陵高等学校　三年　杉山（すぎやま）　明璃（あかり）

今回講演してくださった方は、交通事故で息子さんを失った経験をもつお母さんでした。息子さんは、明るくて元気で優しい性格の男の子だったそうです。そんな性格だったため、いつもたくさんのお友達と遊んだりして、楽しい生活を送っていました。そしてある日、「ノートを買いに行く。」と言って外へ出て事故にあい、帰らぬ人となってしまいました。事故にあった当人さんはもちろん、御家族、御友人、男の子を知る人すべてが身体的にも精神的にも、大きくて深い傷を負うことになったと思います。ある日突然、誰かが自分の前からいなくなってしまう。こんな悲しくて辛いことは他にはないと私は思います。たとえ、どんなに長い月日が過ぎたとしても、心の傷は存在し続けると……。

今回は「交通事故で息子さんを失った」というお話をききましたが「命の危険」は、まだまだあると私は思います。現在、「事件や事故が起きた」というニュースを見ない日はありません。私の母はそんなニュースを見て、「昔はこんなに危ない、恐ろしいニュースがたくさんなかったのよ。」とよく言っています。私たちの暮らしの中には、たくさん危険があり、いつ、どんなかたちで被害にあうかわかりません。常に危険はついてくるということなのでしょうか。

今回、講演をきいている中で一つのある言葉が私の頭から離れませんでした。その言葉とは、「命があることは、あたりまえではない」という言葉です。この言葉から私は四つのことが思い浮かびました。

一つ目は「いつ、どこで、どんな危険が私たちを待っているかわからない」ということです。命を守るためにも、こんなことを少しでも考えるべきだと感じます。

二つ目は「生きたくても生きられない人がいる」ということです。事故や事件に巻きこまれてしまい亡くなる人、病気になってしまい亡くなる人、たくさんいらっしゃると思います。でも一人ひとり、暮らす未来は違うと思います。そんな中、ある日突然、命を奪われるという現実を経験するということです。

三つ目は「死んでいい、傷ついてもいい命などない」ということです。私たちが生きていく中で、この上なく傷つくことは、たくさんあると思います。深く傷ついてしまった心は、そう簡単には立ち上がることはできません。でも、それが自分の未来につながると信じ、今ある現実を乗り越えていかなくてはならないと感じます。

四つ目は「命は一人だけのものとは限らない」ということです。未来へ進んでいく人生の中で様々な試練や困難が待ちうけています。でも、必ず応援してくれる人、味方になってくれる人がいると私は信じています。毎

日がつらくて、悲しくて、さみしくて、「死にたい」と思っても、そのときは「生きること」だけ考えるべきだと思います。少しプラス思考になるだけで、人生の見方は変わります。これは実際に私の経験ですが、直接、言葉や声かけをしてくれる人がいなくても、心の中で自分を応援してくれているということを知っただけで、今までの何倍もふんばり、がんばることができました。その時私は、「自分を応援してくれる、見守ってくれる人すべての気持ちが私の命にもある」と感じました。人生は一人で戦うことはもちろんありますが、周りの助けも必要となるときがあると思います。

命には、たくさんの人々の気持ちが入っています。今回の講演で改めてそう感じました。それと同時に自分の命の大切さ、命を通じての周りの暖かさを学びました。